

**平成28年 新春懇談会**

**年 頭 に あ た り**

**平成28年1月8日**

**礼文町長 小 野 徹**

明けましておめでとうございます。  
輝かしい平成28年の新春をみなさんとともに迎えることができたことを心からお慶び申し上げます。

また、本日は、新年早々の何かとお忙しい中、新春懇談会にご出席を賜り、厚くお礼申し上げますとともに、皆様には、日ごろから町政の推進にあたり格別なるご理解とご協力をいただいておりますことにあらためて心から厚くお礼を申し上げる次第でございます。

さて、本年も年の始まりにあたり、新春懇談会の席上で、町の表彰条例に基づく「功労者表彰式」を行わせていただきました。

本日受賞された皆様方は、永年にわたり、それぞれの分野で、常に情熱をもって郷土礼文町の発展のため献身的にその職務に精励され、地方自治や住民自治の進展、離島の医療や教育やにご尽力をいただき、また、地域を災害や火災、海難事故から守り、安心安全な地域づくりと住民福祉の向上のため、長きにわたって、尽くされた方々でございますし、また、去年は、本町の選挙管理委員会委員としてご尽力された「畠 静子」様が退任されましたので、退任にあたり、永きにわたる格別なるご尽力に対し、感謝状を贈らせていただいたところでございます。残念ながら全員の出席をいただくことはできませんでしたが、心から敬意と感謝を表すところであります。

新しい年の始まりにあたり、ふるさと礼文町の発展を願って大きな夢の種をまかれ、本町の振興発展に多大なご功績を賜りました皆様にあらためて衷心より深甚なる敬意と感謝を申し上げる次第でございます。

これからも礼文町発展のため、変わらぬご支援ご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

また、これも新年早々のおめでたい話題であります。去る1月5日、本町において「交通事故死ゼロ2千日」を達成することができました。

警察署長さんをはじめ交通安全協会の皆様、また、交通安全に携わる全ての皆様に心から感謝申し上げるところでございます。

今後、さらに「交通事故死ゼロ2千5百日」達成に向かって、町民一丸となって交通安全に努めてまいりますので、さらなるご支援ご協力をお願い申し上げます。

さて、2016年、平成28年は、申(さる)年であります。

今年の干支は「丙申(ひのえ・さる)」と云いまして、サルは、木の上を活発に動き回ることから、とても元気で行動力のある印象があります。

あの有名な豊臣秀吉は、織田信長のもとで、大出世をし、申年生まれの申し子とも言われています。

「丙(ひのえ)」は「樹木の形が明らかになってくる頃」を意味し、「申(さる)」は「果実が成熟しながら固まっていく状態」を表していることから、今年は「これまでの頑張りが形になっていく」ことを意味するようであります。

今から 60 年前、1956 年(昭和 31 年)の日本は、昭和 29 年 12 月から昭和 32 年 6 月まで続いた「神武景気」の最中で、爆発的な好景気によって戦前の経済水準を超えるまでに回復して、高度経済成長期の始まりとも云われ、経済白書にも「もはや戦後ではない」と記載されるほどでありました。

このように、60 年前の「申(さる)年」昭和 31 年は、戦後の復興があらためて明確に実感された年となったと云われております。

また、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸がこの年に政令指定都市になり、もともと大都市であったわけですが、制度上も政令指定都市として明確に位置づけられた年でもございます。

歴史は繰り返されると云われますが、こうした歴史をみますと、2016 年のキーワードは「形が明らかになっていく」「実が固まっていく」であり、「これまで日の目を見なかったことが形となって現れてくる年」になると云えます。

そして、今まさに、地方創生戦略も固まりつつあります。

本町では、人口減少に歯止めをかけるため、昨年から「礼文町まち・ひと・しごと創生」に向けた総合戦略の策定に取り組んでまいりましたが、おかげさまで「礼文町まち・ひと・しごと創生戦略策定審議会」での審議を経て、去る12月25日に答申をいただくことができました。答申を受けた「人口ビジョン」からも、「島に暮らす人々が幸せを感じ、将来にわたって住み続けたいと思えるまちづくり」と「島を訪れる人々も魅力を感じ、住みたいと思っただけのまちづくり」の必要性が求められ、めざすべきみつつの方向性が提言されています。

そのひとつは「安心して出産・育児・子育てができる環境を整えること」であり。

二つ目は「島への新たなひとの流れをつくり、人口流出に歯止めをかけること」。

三つ目は「地域の変化に柔軟に対応し、効率的、効果的な社会基盤の再構築を行い、ともに支えあいながら安心して住み続けられるまちづくりを進めること」のみつつであり、5年後の2020年の人口を2518人、2040年は1974人と、国立社会保障・人口問題研究所(社人研)が予測した人口を上回る数の人口をめざして、総合戦略を実行していくこととなります。

また、新たに「一億総活躍社会」に向けた取り組みも加わって、相互に連動して進めることとなりますので、新型交付金などによる思い切った取組みが必要であります。

先ごろ厚生労働省が発表した「昨年的人口動態」では、2015年に生まれた赤ちゃんは100万8千人で、5年ぶりに増加したとのうれしいニュースがありました。

全国的に、雇用情勢の改善や子育て支援にむけた状況の変化といった社会の変化が30代女性の出産につながり、全体の出生数を押し上げたと伝えられています。

わが町においても、ここ数年、子育て支援等を進めてきた中で、少しですが、赤ちゃんが増えておりまして、少しずつ、明るさが感じられるようになり、少しずつ流れが変わってきているように感じております。

今後は、年明け早々から議会との最終の調整を行い、「人口ビジョン」を達成するための本町の総合戦略として決定することとしております。

同時に、今年度は地方創生の取り組みがスタートとなります。

それは、「安定した雇用を創り出すこと」「新しい人の流れをつくること」「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえること」「時代にあった地域づくりと安心なくらしを守るとともに地域と地域を連携すること」という4つを基本目標とした総合戦略によって、今後5年間、本町の人口減少や経済縮小などを克服し、町を元気にするための大きな挑戦であります。

その大きな柱は、やはり、礼文町の基幹産業である「漁業」と「観光」を振興させることであり、本町経済の基盤を安定させ、働く場を増やし、元気なまちにすることだと思っております。

本町の昨年の香深船泊両漁協合わせた水揚金額は、35億9百万円と見込まれており、漁船漁業のホッケやタラ、磯根漁業ではウニなどの水揚量が大きくが減少した中でも、価格の上昇によって4年続けて30億円の大台を確保し、過去最高に迫る水揚げを記録した漁業者の皆さんの頑張りに心から感謝しているところでございます。

本町の主要かつ年間水揚量全体の40%を占めてきたホッケ漁は2200トンと対前年比26%の減少でしたが、単価が上昇したため、金額では17%増の6億8千百万円となっています。

また、ウニは水揚量金額とも前年並みで、天然コンブは豊漁だった前年を30%近くも下回りましたが、養殖コンブでは水揚量で69トン、金額では1億6千5百万円とそれぞれ前年の約3倍となりました。さらに、今や全漁獲高の2割を占めるまでとなったナマコは、前年と比較しますと水揚量で18%増、金額では30%の増となっています。

しかし、年々、漁業者の高齢化が進んでいるなか、意欲ある若い漁業者を確保するため、町独自の「漁業担い手支援事業」により、ソフト・ハードの両面から若い漁業者や町外からの移住による漁業者への支援を行なっております。

おかげさまで、昨年は、船泊地区に2戸の「漁業者支援住宅」が完成し、これで香深船泊それぞれ2戸、合計4戸の「漁業者支援住宅」ができました。

この住宅で温かいお正月を迎えられたことをとても嬉しく思いますし、3年目となる今年も計画的に建設してまいります。

これからも、総合戦略に謳われているIターンやUターンなどで島に移り住んでこられた若い漁業者や島の漁業後継者の住宅環境を改善し、安心して漁に出かけられるよう、若い漁業者育成のため「漁業担い手支援事業」をさらに推進するとともに、「担い手支援」「住宅支援」のほかに、今年は町と水産指導所、両漁業協同組合がともに協同して、新たに「コンブ」の養殖技術普及を進めて所得を確保する支援策を加えることとしておりますので、「担い手支援」「住宅支援」に、新たな「技術支援」、所謂「漁業担い手支援に新たな三本目の矢」を加えて、若い漁業者を育成し、漁業の安定的な発展と浜の活力を取り戻してまいります。



さらに、礼文島の海産物に付加価値を付ける取り組みも、「礼文町水産加工品開発協議会」を中心にした「礼文ブランド」の開発は喫緊の課題であります。

新しい製品の開発をさらに進め、TPP 対策としても、これら海産加工品の国内、海外への販路拡大を通して水産加工の振興と雇用の場の拡大を図るとともに、将来的には、企画から加工、販売までを一貫して行う島内での新しい地域経済流通システムとして、所謂「礼文島の漁業6次産業化」を進めることによって、島で獲れた海産物に大きな付加価値をつけ、礼文島内に若者の働く場を増やす総合戦略として取り組み、若者の定住を促進して、町を活性化させる「礼文島が生き残っていく」ための「攻め」の形を創りたいと考えているところでございます。

一方の観光につきましては、今年度の礼文島への観光入込数は、約11万6千人と見込まれ、前年度より4.8パーセントの減少となっております。

今年は3月26日に、函館まで新幹線が開通いたします。北海道もいよいよ新幹線時代に入ったのでございます。

函館からは遠い礼文島ですが、観光の振興は、わが町に大きな経済効果をもたらしますので、礼文島観光協会と協働し、北宗谷、稚内、利尻礼文といった広域の取組みとして、全国からの観光客向けに全日空とタイアップした商品づくりや、北海道新幹線の玄関口である函館空

港と稚内空港を利用したチャーター便の運航などFDAと連携した取組み、更には、近年増加する外国人観光客の受け入れをもっともっと積極的に進めるための環境整備を行なうなどして、国内外からの個人、団体客の誘致を強力に進めてまいります。

また、本町の皆さんに沢山のご支援を頂いた映画「北のカナリアたち」のロケセットを中心にした「北のカナリアパーク」の入園者が昨年は3万3千人と10%の増となったことは、礼文島に新たな観光施設が開いたと強く感じています。

これからも「北のカナリアパーク」を中心とした施設整備に取り組み、町民皆さんはじめ礼文島に観光についての皆様方に「北のカナリアパーク」をさらに進化させた憩いと交流の場として提供してまいります。

さらに昨年3月には、香深港フェリーターミナルのバリアフリー化により、雨風や雪、それに階段やタラップに悩まされることなく気楽に乗り降りができるようターミナル2階とフェリーを直接結ぶボーディングブリッジが完成し、高齢者や身体の不自由な方々からも、優しい施設になったと大変喜ばれております。

また、町民皆さんの憩いの場となっている「礼文島温泉うすゆきの湯」も、平成21年10月の開設から、早いもので7年目を迎えました。

これまで、町民の皆様や観光や仕事においでの皆様方にご利用をいただき、昨年8月18日には開設から2千522日目で30万人のご利用をいただきました。心から御礼申し上げます。どうぞ、これからも「うすゆきの湯」が皆さんに愛され、町民皆様の健康づくり、また礼文島を訪れてくださる皆様の保養と憩いの場、そして交流の場となるよう、安心して快適な施設づくりに努めてまいります。

「最北の癒しの島づくり」は、礼文島が誇る世界水準の自然環境と多様な産業との調和、人と人との繋がりが重要であります。人は、いくらいい景色や可憐な高山植物、いい食べ物があっても、そこにいい人との出会いがなければ、心に残る島や思い出の町にはならないと云われます。

人と人との繋がりがあう「礼文島らしいおもてなしづくり」をもっともっと進めてまいります。

さらに、今、「礼文高校の魅力づくり」は大変重要な課題であります。10周年を迎えた本町独自の「教育連携」は教育関係者のたゆまないご努力によって他に誇るべき礼文町の教育となっておりますが、その中軸となる礼文高校をもっともっと魅力ある高校にして活性化させなくてはなりません。このため昨年6月から、教育委員会に町内有志のみなさんによる「礼文高校のあり方検討会」を発足させていただいて、これからの礼文高校がどうあるべきか?について議論を重ねていただきました。

間もなく、その結論を提言として頂くことになっておりますので、礼文高校がこの島になくてはならない高校とするために、その提言を地方創生総合戦略の重要なテーマにしたいと考えております。

「地方創生元年」と云われる今年、私はこれを「これまでの苦しい頑張りが形になっていく。新しい世の中が始まる」という風にとらえ、明るい希望と夢をもって、本町の活性化のため、地域のインフラ整備をはじめ新たに策定する総合戦略で、徹底した「定住促進対策」や「子育て支援」、教育の振興、高齢者へのきめ細やかな取組み、それに、労働力不足を解消する所謂「元気集団」の早期の立上げなども民間に頼るのではなく、総合戦略として、早急に取り組む必要があります。

今後5年間、様々な取組みを進め、それによって、「若い世代の夢や希望に応える町にすること」、また「漁業や観光が飛躍できるチャンスを創れる町にすること」が私たちの課題であり、大きな挑戦であると考えております。

私は、その先頭に立って「明るく、元気なふるさと礼文町」を創りあげ、「安心して暮らせる礼文島」にしてまいりますので、あらためて、町議会議員各位並びに町民皆さんの尚一層のご理解ご協力をお願い申し上げます。

今年香深村船泊村が合併し礼文村になって60年という節目の年であります。

60年前の昭和31年、1956年9月20日に私たちの先達は「昭和の合併」という大きな決断をしました。当時の香深村の人口は5428人、船泊村は4446人、合わせますと9874人の礼文村。

先達は、一つの島にひとつの行政体という大きな財産を、現在の私たちに残してくださいました。

昭和34年に町制がしかれ、現在の礼文町となりましたが、その後水産の町、観光の島として大きな飛躍を遂げてきたことは皆さんご承知のとおりであります。

今、縁あって、私たちはこの島で、60年目を迎えました。

そのご縁に応えるためにも、節目の今年「未来に元気のタネをまく」一年にしたいと考えています。

以上、輝かしい新春にあたり所感の一端を述べさせていただきました。

町民皆様にとりましても、今年一年が素晴らしい年ですよう心からお祈り申し上げ、新年のご挨拶いたします。

本年もよろしくお願い申し上げます。

“ご清聴ありがとうございました。”